弘法大師（空海）　篇２

大師伝説

弘法大師（空海）に関係する伝説は、全国各地にあります。お寺を造ったこと、仏像を刻んだこと、水や井戸、植物、岩にまつわることなど様々です。いくつかをご紹介しましょう。

大師が唐（現在の中国）に留学して帰国する前に、そこから日本に向かって独鈷（どっこ）（密教（みっきょう）で使う仏具のひとつ）を投げ、それが落ちたところに寺を建てようと決めました。

帰国後、諸国をまわってその独鈷の落ちた場所を探していると、室生の山中に昼夜光るところがあり、その場所に寺を建てることとしました。それが現在の室生寺で、五重塔は大師が一夜で建てたとも伝えられています。また、重要文化財となっている木造薬師如来立像や木造文殊菩薩（ぼさつ）立像は、大師が造ったとの伝承もあります。

大師は唐から茶の種と茶臼も持ち帰り、佛隆寺内には「茶園」が造られたといわれています。お寺には麒麟が彫られた茶臼も伝えられており、佛隆寺は「大和茶発祥の地」となっています。

この他、大師が使った箸を井戸の周りに立て、それが大木になったという「高井の千本杉」や、爪で岩壁に描いたという「爪書き不動尊」（自明（じみょう））などといった伝承地もあります。

令和５（２０２３）年は、真言宗を開いた弘法大師が生まれて１２５０年の節目の年になります。大師は高野山の金剛峯寺奥之院に生き続け、祈りによって人々を救っているとされています。奥之院には20万基を超える諸大名の墓石、祈念碑や慰霊碑などが建ち並んでおり、今も多くの人々の信仰を集め、親しまれています。